様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１４４０３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３０８５４

研究課題名（和文）多様なピア・サポート実践の相互対照群モデルによる評価

研究課題名（英文）Evaluation of various peer support practices by mutual comparison model

研究代表者
戸田　有一（TODA, Yuichi）

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：７０２４３３７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,600,000円、（間接経費）　480,000円

研究成果の概要（和文）：子どもたちの支えあいを育むピア・サポート実践が、海外の実践を参考にしつつ日本国内でも工夫され多様化している。本研究では、多様なピア・サポート実践の評価において、それぞれの実践群が互いに他の実践の対照群となることによって、対照群を設定する労力やためらいを低減する目的で案出した「相互対照群モデル」による評価を行った。最終結果は未公開のためにここには提示しないが、ピア・サポートを含む最先端のいじめ対策である、フィンランドのキヴァ・プログラムの実践導入を行うなかで、実践上の検討事項を明確にし、評価項目も新たに作成した。

研究成果の概要（英文）：Peer Support practices were introduced into Japan and shared among practitioners in last two decades. Japanese ways of practicing Peer Support were developed in various ways considering Japanese situations. This study was aimed to evaluate the various types of peer support practices at once using mutual comparison model, which allows each practice to be compared with the other as a control group. The results would be shown here after the acceptance in academic journals. In the process of the implementation of Japanese KiVa trial (Finnish Program which includes peer support), difficulties and possibilities were discussed and new items for its evaluation were proposed.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：いじめ予防　ピア・サポート　実践評価　相互対照群モデル　キヴァ

１．研究開始当初の背景

子どもたちの支えあいや学びあいを育むピア実践（ピア・サポート実践／ピア・メディエーション実践／ピア・チューター実践等）が、海外の実践を参考にしつつ日本国内でも工夫され多様化している。しかし、実践の効果検証研究はまだ少なく、かつ、個々の実践について単独に行われてきた。

これまで研究代表者らは、それらの実践を分類して記述し、実践の評価モデルについての検討を重ね、ピア･サポート実践の特長と課題を検討してきた。

２．研究の目的

本研究の目的は、多様なピア実践の評価において、それぞれの実践群が互いに他の実践の対照群となることによって、対照群を設定する労力やためらいを低減する目的で案出した「相互対照群モデル」による評価を行うことである。

国際比較研究の結果を参照しつつ、日本国内の各実践の目的や効果について改めて詳しい面接調査を行い、質問項目群を紡ぎ出し、実際に「相互対照群モデル」を用いて実践評価研究を行う。その実践評価結果から、実践への示唆を各実践者と共有することを目指す。

ここでは、研究成果として既に学会発表を行い、公表できる段階までを報告する。具体的な目的としては、ピア・サポートの要素を含む､フィンランドのキヴァ･プログラム（以下、キヴァと略す）の日本への導入実践経緯から検討課題を明確にし、その中で評価項目候補を得ることである。

３．研究の方法

まず、キヴァを、いじめ対策を軸とした総合的な生徒指導として、日本の学校教育への導入を試みる。日本の教育制度や風土を考慮し日本の実践者のアイディアを盛り込むことから、いわば「和風キヴァ」である。試行実践をして、日本の実践で配慮・工夫すべき観点を明らかにしつつ、質問項目群を準備する。

実践の場はＮ市立Ｉ小学校で、参加者は小学校５年生の計 126 名。4 クラスのすべてを一人の授業者が担当する。授業者の違いによる影響をなくすためである。いじめについて学ぶ授業「KiVa レッスン」と、コンピューターゲーム形式の「KiVa ゲーム」等のうち、フィンランドでは４年生に実施されているレッスンプランを改良して実践する。レッスンは、45 分の授業を月１回２コマ分、年 10 回行うのが基本だが、フィンランドでも実践校の実情にあわせて実践しており、無理な実践導入はしない。

６月に第４発表者が５年生４クラスを参観して実践者と話し合い、クラスのニーズを踏まえて、２つのクラスではキヴァではなく、ピア・メディエーション（以下、PM と記す）を先行実施し、相互対照群モデル（戸田・宮前，200 ）を用いて検証する。キヴァ先行のクラスも、キヴァの後に続いて PM を実践する。PM では、AL’S メソッドを中心としたもめごとへの仲裁スキル獲得（池島・竹内，2011）を目指す。

実践の検証も、質的及び量的の両者を用いるトライアンギュレーションの考え方にのっとって多角的に行う。

量的には、①アセス、②複数実践同時検証（キヴァ＋PM）アンケートを用い、質的には③毎時間の子ども自身のふりかえり、④担任による行動観察を用いる。

＜試行実践＞

おとなになっていくということは、人間関係を広げていくことである。家族愛、学級愛、学年愛、愛校心、郷土愛、愛国心、世界愛など、現状として子どもたちの人間関係はどこまでの範囲を指すのかを「Family」というキーワードで子ども自身に認識させることから始まる。授業ではリフレーミングをし、固定化されない人間関係を捉えさせた。子どもたちは自分自身の人間性を見つめ直し、「みんな」との「出会い直し」を通して、「Family」を広げていくことを目指す学習であることを認識した。子どもたちに、「リアル家族（自分の家）」と「○組 Family」との違いは何か、と問いかけ、理屈抜きの安心感があるかないか、いじめがあるかないかであると指導者が返した。

４．研究成果

今回の試行実践での、質的な検証である毎時間の子ども自身のふりかえりと、担任による行動観察について報告する。

(1)子ども自身のふりかえり

第１時を終えて、子どもたちの人間関係はやや閉鎖的であり、決まった中での人間関係にとどまり、広がっていきにくいという実態があった。マンガ『ONEPIECE』への共感はできても、所詮他人事で自分のこととして生活に還元されていない。しかし、一方で「チーム」や「みんな」、「仲間」などの言葉に共感し、ほっこりしたりうれしい気持ちになる子どももいた。

「クラスの中でみんなのことをもっと知りたい」「この授業で○組 Family をつくっていきたい」「Family はすごくいいものだな」「一人ぽつんといるんじゃなくて、だれかと一緒なら何かが生まれる」等の感想からもうかがえる。

ある男子児童の感想に「今日やった道徳の勉強で、すごくというか普通の勉強よりも何かしらのものを感じました。何かしらのものといってもよくわからないのですが…。」というものがあった。この児童は Family をキーワードにして、自分の中で「心の揺さぶり」を体感しているのであろう。決まり文句ではない感想に、教える側も考えさせられた。

(2)担任による行動観察

授業後、第１時授業を実施した学級の担任が、「最近、『みんな』で協力したり、がんばろうとするときに、Familyという言葉が飛び交うんです」と言っていた。

(3)実践者の観点からの考察

フィンランドのキヴァにヒントを得た上で、子どもたちや日本の学校教育に応じた日本版キヴァを目指していく。つまり、プログラムの可変性を前提とした実践だといえるが、少なくとも、以下の３点（教材論、カリキュラム論、発達論）について検討を行う必要がでてきた。

１つ目は、KiVaゲームや外国人の映像・写真などの教材を、日本のものにアレンジせずにそのまま使うかどうかという点である。この点については、合間に行う「ゲーム」を通して、いじめ発生時の対処法、特に「傍観者」にならない方法を楽しみながら練習できるということは魅力的である。また、他国の文化ではあるが「いじめ」という本質が同じであるため、＜リアル過ぎず、別世界過ぎず＞の場面を設定することができる。従って、現時点では、もとのままでいいのではないかと考えられる。

２つ目は、子どもが今求めるものを学習していくために、＜前時最終 or 本時初頭＞に学習内容を選択していく複線型学習の検討である。日本の教科学習は、知識としてのつながりに即しての単線型学習であることが多い。しかし、「いじめ」というテーマにおいては、子ども主体で学習内容を選択して実践していくことで、枠に縛られることなく人間性を築いていくことができる。この点におおいに工夫の余地がある。

３つ目は、子どもの関係性発達に関する理論的及び実践的検討である。子どもたちの成長過程では、出会い所属する集団が様々に変容していく中で、子どもたち自身が語る「みんな」の意味が変化する。その、子どもたちにとっての「みんな」の意味の多様性、生きる範囲の違いを記述するための理論的枠組みを検討していく必要がある。また、その多様性や範囲を実践のなかで継続的に把握していくことで、子ども一人ひとりの人間関係が広がっていくことを検証していきたい。

(4)道徳教育専攻院生の観点からの考察

道徳の時間を用いて行う場合、人間関係を広げていく、相手を、自分を尊重するというところから、キヴァの順序に合わせて、道徳の指導項目の四つの視点になぞらえて、指導の計画を立てていくのが良いでしょう。今回行われた第１時の授業では、主として自分自身に関することという視点の中の、１－（６）の個性伸長の部分があてはまると思います。また、今後どういった展開をされるのかを存じ上げませんので参考にならないかもしれませんが、人間関係を広げていくというところから、主として他の人とのかかわりに関することという視点に移り、互いに尊重するということで礼儀や謙虚さ、また友情や平等感について触れることができるのであれば、道徳の授業の一環として行うことは可能であると考えられます。

最終的な目的として、人間関係を広げていき、世界愛等の広大な範囲まで広げるのでしたら、その後も視点をなぞり、主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること、主として集団や社会とのかかわりに関すること（4 つ目の集団や社会に関することが最終目的には一番近いと思います）の内容にからめてキヴァを一つのエクササイズと位置付けることができ、道徳の指導要領の範囲を超えない形で行うことができると思います。

難点として、エクササイズにどれほど時間がかかるのかということが挙げられます。道徳の時間として、何かしらのエクササイズをしただけでは成立したとはみなせないという性質がありますので、エクササイズの後のリフレクション等が求められます。道徳の時間は年間 35 時間であり、22 の指導項目を全て達成することが必要となります。エクササイズからリフレクションまでで 45 分で収まらないのでしたら、一つのプログラムで 2 時間使うことになり、道徳の時間を 20 時間使うことになります。すべてのキヴァで違う指導項目を満たせるのでしたらそこまで大きな問題にはならないと思いますが、重なる部分が出てきますと、他の指導項目を満たせないという可能性が出てきます。重点項目を各学校で定め、複数回行うことは認められていますが、そのために他の指導項目を実施しないというのは指導要領上不可能ですので、その際は特別活動や総合的な学習の時間を活用しなければならないと考えます。

(5)実践支援研究者の観点からの考察

本報告は、実践展開の途中経過の報告であり、第１回の授業の時点での結果のみとりと考察である。しかし、単なる翻訳実践ではなく、実践者集団の協働から紡ぎあげた実践からは、検討すべき重要な観点があらわれている。

本報告の実践では、学年初めの集団形成に子どもたち自身による選択があったかどうかを問うのではなく、約半年間の学級共同生活後の「出会い直し」を意図している。考えてみれば、私たちの人生は、偶然の出会いからの関係性継続（当初は、取り換え可能性が高い）から結果的に、互いを深く知りあうなどのために互いの取り換え不可能性を生み出していることがほとんどである。「くされ縁」などと言ったりもする。

学級のあり方のみに矮小化した論議ではなく、人間の生き方の営みをどのようにとらえるのかの議論もしなくてはいけないのだろう。（評価項目も未発表なので未掲載）

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４件）

1. 戸田有一・青山郁子・金綱知征（2013）ネットいじめ研究と対策の国際的動向と展望．一橋大学＜教育と社会＞研究，23，25-35．
2. 宮川正文・竹内和雄・青山郁子・戸田有一（2013）ネット問題とネット相談掲示板実践．一橋大学＜教育と社会＞研究，23，37-48．
3. 戸田有一（2013）欧州諸国におけるいじめ・ネットいじめ問題と対策の展開．教育と医学，725，38-47．
4. 戸田有一（2013）いじめ研究と学校における予防実践支援．発達心理学研究，24，460-470．

〔学会発表〕（計　６件）(国外分のみ)

1. Mizuno, H., Toda, Y., Yanagida, T., & Strohmeier, D. (2013) Relationship between help seeking expectations and school bullying: comparison between Austrian and Japanese pupils. Poster presented at the 16th European Conference on Developmental Psychology, Lausanne, Switzerland, 4th September, 2013.
2. Toda, Y. & Bauman, S. (2013). Cyber-problems and related factors among adolescents: Addiction, risky behaviours, and delinquency in Japan. Symposium at the 16th European Conference on Developmental Psychology, Lausanne, Switzerland, 5th September, 2013.
3. Takeuchi, K., Aoyama, I., Kanayama, K., & Toda, Y. (2012). City-wide Anti-cyberbullying Activities Initiated by Students: City-wide Evaluation according to School Surveillance. International Conference on Cyberbullying (COST IS0801), 30 June, 2012. Paris, France.
4. Toda, Y., Sakai, K., & Strohmeier, D. (2012). Sequential relationship analysis on traditional/cyber bullying data from Japan and Austria. The 13th Biennial Conference of the European Association for Research on Adolescence, Spetses, Greece, 31 August, 2012.
5. Toda, Y. & Kanetsuna, T. (2011) The Evaluation of Anti-Bullying Programs led by Student Committee. The 15th European Conference on Developmental Psychology. 24 August, 2011. Bergen, Norway.
6. Aoyama, I. & Toda, Y. (2011) Regional Differences on Bullying Intervention Training and Strategies among Japanese Schools. The 15th European Conference on Developmental Psychology. 25 August, 2011. Bergen, Norway.

〔図書〕（計　７件）

1. 戸田有一（2014）集団現象としてのいじめの効果的な予防とケアを．子安増生・仲真紀子（編）『こころが育つ環境をつくる発達心理学からの提言』，(pp．85-107)．新曜社．（全 288 頁）
2. 山崎勝之・戸田有一・渡辺弥生（編著）(2013) 世界の学校予防教育．金子書房．（頁数 448 ページ）．
3. 戸田有一（2013）家庭・学校でのいじめ対策：深刻な事例から考える．東洋哲学研究所（編）『教育：人間の可能性を信じて大乗仏教の挑戦８』，(pp．45-84)．東洋哲学研究所．
4. 戸田有一　(2012)　「第 16 章　攻撃性・抑うつと問題行動」 日本発達心理学会(編)氏家達夫・遠藤利彦(責任編集)『社会・文化に生きる人間―発達科学ハンドブック５』(pp.189-199)．　新曜社.
5. Strohmeier, D., Aoyama, I., Gradinger, P. & Toda, Y. (2012) Cyber-victimization and cyberaggression in eastern and western countries. In S. Bauman, D. Cross, & J. Walker (Eds.), Principles of cyberbullying research: Definitions, measures, and methodology (pp.202-221). New York: Routledge.
6. 戸田有一　(2011)「いじめられる側にも問題があるのか―いじめ現象の理解といじめ対策実践の再考」 大久保智生・牧郁子（編著）『実践をふりかえる教育心理学』ナカニシヤ出版.
7. Toda, Y. (2011) Bullying (Ijime) and its prevention in Japan: A relationships focus. In R.H. Shute, P.T. Slee, R.Murray-Harvey, & K.L. Dix (Eds.) “Mental Health and Wellbeing: Educational Perspectives” Adelaide, South Australia: Shannon Research Press.

〔その他〕

ホームページ等

https://www.facebook.com/yuichi.toda.77

６．研究組織

(1)研究代表者

戸田　有一（TODA, Yuichi）

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：７０２４３３７６

(2)研究分担者

宮前　義和（MIYAMAE, Yoshikazu）
香川大学・教育学部・准教授
研究者番号：４０３２５３２９